

令和5年度 第3回 大阪府立西成高等学校 学校運営協議会 記録

【日 時】 1月31日(水) 16:00～18:00
【場 所】 大阪府立西成高等学校 多目的室 A
【出席者】 (会長) 西田芳正委員 (副会長) 高見一夫委員 緋田隆平委員 榎井縁委員
田中俊英委員 臣永正廣委員 堂上勝己委員 西田吉志委員 山下佳織委員

【内 容】

1. 開会
2. 校長挨拶
3. 議事
 - (1) 「令和5年度 学校経営計画及び学校評価(案)」
及び「令和6年度 学校経営計画及び学校評価(案)」
 - ①令和5(2023)年度 学校教育自己診断アンケート結果について
 - ②各学年の様子について
 - (2) 48期生 進路状況
 - (3) その他
4. 閉会

【事務局からの説明および各委員からの意見等】

- 1.開会
- 2.校長挨拶

校長： (協議会メンバーに) 臣永区長にも入って頂いて、充実した地域の輪が、出来上がった運営協議会が実施できている。次年度からはステップスクールになって、エンパワーメントスクールも2年3年には残っているが、新しい学校作りをどの様に継承してどの様に改革していくのかが、非常に悩ましいことでもあり、面白いところではある。今年度を振り返りながら、次年度に向けてのご提言を頂けたらと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

3.議事

- (1) 「令和5年度 学校経営計画及び学校評価(案)」
及び「令和6年度 学校経営計画及び学校評価(案)」

校長： この令和5年度をどのように令和6年度に引き継ぐかを考えたい。学びと支援の結合ということで、どのように生徒たちをエンパワーするのかという視点で行ってきた。ステップスクールになったときには、エンパワーするという取り組みは大事だが、生徒たち自身が主語になるような学校運営をどうするのかというところを、メインに考えたいと思っている。
とは言え、主語になっていることを感じてもらう事も重要なので、午前中のエンパワフェスタでの生徒達の自分の言葉での発表は、今までにない良いものであり、着実にそちらに向けて進んでいることが感じられた。

① 令和5(2023)年度 学校教育自己診断アンケート結果について

◎生徒のアンケート

傾向としては、過去5年程度安定して満足度の高い結果であり、本校の学校運営や教育内容等が現状にマッチしていることが伺える。例えば、『エンパワメントスクールに来てよかった』という生徒の診断を見ると、生徒の半数以上が「そう思う」と答えている。「まあそうかな」ではなく、「そうだ」と言ってくれているということが評価としては非常に良い。

例えば人権や福祉について学ぶ機会があるというのは、全体で92.6%の肯定的な回答。「そう思う」というのは、とても多い。安定して満足度が高くなってきている理由の一つではないかと思う。

やはり授業がわかりやすい、先生が工夫している、質問しやすい、評価について納得できる、悩み事や相談事を親身になって教えてくれる先生がいるなどの部分についても80%を超える肯定感が出ている。例えば「悩み事や相談を親身になってくれる先生がいる」というのは、多くは85%を超えているというところで見ると、生徒からきっちり評価されていると思う。

◎保護者のアンケート

PTA 会長をはじめ、役員の方は非常に関心持って、毎回のように学校の方にも来て頂いている。「土曜日に授業参観があると子どもたちの様子がわかりやすい」、「文化祭、体育祭など学校で行われている行事は参加しやすい」という項目は他の肯定感に比べて少し下がっている。その他は、概ね学校の取り組みに対して8割を超えて、好意的に見て、理解して頂いている。

「子どもが西成高校に入学してよかったと思う」という項目は87.3%の方が肯定的に思っていて、非常に高い数値である。

◎教職員のアンケート

昨年度、非常に良い結果になって、分析に困った。「各分掌や各学年間の連携が円滑に行われ、有機的に機能している」の項目は、昨年は90%を超えていた。今年は82.4%であった。

「学年会議で生徒情報に関する円滑な情報共有や課題検討が行われている」の項目は84%、これも昨年は90%を超えている。昨年度の爆発的な肯定的評価は、当時、教頭1名欠員のため、校長が職員室に常駐化していたため、比較的、共有が早く進んでいた。大職員室にして3年目で、いろんな形で情報共有も非常にしやすくなり、Teamsも含めて、瞬時でいろんな情報共有ができるということが進んでいる。これが常態化したために、落ち着いた評価になってきた。

◎次年度へ向けての課題

各分掌の達成状況などあるが、例えば生徒指導案件は、冬場に入っているいろいろな問題が多く起きている。頭ごなしでない、落ち着いた生徒指導や生徒支援を行ってきたこの5年ぐらいの流れがあるが、もう少し規律的な部分が必要になってきている。生徒の話を聞かずに言うことを聞かせるだけの生徒指導と、生徒の話ばかり聞いて、言うことを聞かせない生徒指導の間に答えがあるはずなので、どの辺りに持っていくのかということ、次年度のステップスクールから考えていかななくてはならない。

次年度からの学習の指導の中ではリテラシー、読み書きの力を重要視している。日本で生まれて日本語で育ってきた生徒の読み書きも怪しい。もっと鍛えなくてはならないと思う。リテ

ラシーを鍛えることで、子どもたちの思考力、判断力などの力が伸びていく。それが実現できる学習の計画が必要になってくると感じている。基本的にはエンパワメントスクールの西成高校のやり方を引き継ぎながら、次年度に向けては、学習の問題や生徒指導についても微修正しながら、生徒たちを導いていけるようなやり方を考えている。

委員： 学校教育自己診断において、保護者の項目で「土曜日に授業参観があると子どもたちの様子がわかりやすい」、「文化祭、体育祭など学校で行われている行事は参加しやすい」「学校では火事や地震などの時にどのように行動したらよいか知らされている」は肯定感の数値が高くなかった。要するに土曜日、文化祭、災害というのは、保護者の日常からすると特別な項目だと思う。特別なことに関して対応しきれてないというのが、この三つの項目の共通点だと思う。高校側に非があるというわけではなく、特別なことに関して、保護者の方もなかなか想定しきれない。普段と違う行事を共有しきれないということに関して事前に例えば 4 月ぐらいから広報していくみたいなことを来年度からできればと良いと思う。

校長： どのレベルまでいったら良いとするかの基準が必要。アンケートの項目の文言も改善が必要かもしれない。子供たちの様子がわかりやすいかどうかは別の問題だから、授業参観があることは良いことかと聞いた方が答えやすいかもしれない。学校側はどの程度達成したらよいかなど目標とすべきところを考えておく必要がある。

委員： 学校のルーティンから外れている出来事に関して、西成高校は配慮しているということを保護者に伝えていくって言うことが必要。学校が全部じゃないという保護者の感覚はあると思う。そうではなく、西成高校の場合は、土曜日も含めて配慮している、それが西成高校の良い点であるということを PR していく。休みは休み、学校は学校と割り切る傾向が現代の大人にある。その中で、日常生活全体を学校はケアしている、配慮している、それが西成高校のあり方というように伝えていけると、親御さんもすごく安心できると思う。発信の仕方だと思う。

校長： 災害については、小学校であれば、子供と保護者と一緒に災害のための何かイベントをすることも考えられるが、高校生に向けてのよいアプローチにたどり着いていない。高槻の震災ときに、生徒の半数近くは登校していて、半数が通学途上で、家にいた生徒もいた。教員たちも何割かは出勤していて、何割かは電車の中にいて、という状況だった。

委員： 西成区と学校サイドとしての協調の仕方。区の方針が多分あると思うので、災害に関しては、西成区の 1 事例として西成高校が対応しているというふうにすると、西成高校は西成区とうまいこと連携しているんだというのを保護者に PR できたら非常に保護者も心強い。

校長： 次年度、1 年生は N-TIME という授業の中で「くらしと防災」という内容を扱う。その中で知識的な理解としては、テレビとかラジオとかあるいはインターネットでやっている災害情報を読み解く力を身につけさせたい。この自己診断そのものも一度リテラシーの観点に立って、文言を考えて取り直していく必要があるだろうと思っている。定点観測的にはずっとこれでやってきたので、次から新しい学校に変わるということで、少しリニューアルしていきたい。

委員： リテラシーに関して教員の方々に諦めみたいな感じはないか。幼いころからやっていないとリテラシーカって上がらないということが本音としてあると思う。

教員： 生徒たちの生活と密着して琴線に触れるようなことがあったら、生徒たちは表現したいと思って、例えば書くとかいうことは、すごく琴線に触れたときにはプワッと文章に書けるから、そういう部分を育てていくということが大事である。

委員： 授業中、ホームルームなどで、何気ないところで生徒の出来なさや感心みたいなのが出てきたときに、テクニックがいるがそれを先生側がアドリブ対応できるとよい。普段から、国語とか、ホームルームなどで、こんな読み取り方あるみたいなことができるすごい関心が引き出せると思う。

校長： やっぱり読むものをすごく関心のあることにもっと限定していくと、これはどういう意味なのかと考えるだろうなというふうに思う。例えば給付金とかいろんなお金の問題があって、もし自分がやらないとだめだとしたらどう読み解くのか。漢字だらけでルビが振っていない。しかし、現実には今、家庭に配布されている。そういうものも含めて、読み書き教室で、何か与えられた教材をずっと読むのではなくて読みたいと思えるような高校生なりの関心に基づいた教材が必要。基礎的な教科、例えば基礎国語などがよいのではないか。そういう教科がないと思考力が深まっていかないのではないかと思います。

委員： 教員が保護者を言い訳にせずに、学校内でどういうふうに取り組むか。例えば、となりカフェの中で、その文化をどう伝えるかとか、ホームルームとかそういう行事の中でも、文化をどう伝えるかなどそういう具体例の中でやっていくことになる。教員の方は取り組み続けてきていると思うので、改めてやるときはやはり学校の教員の人たちのモチベーションのインセンティブを上げるためにどう出すかっていうのは校長側の技術だろう。

議長： 生徒たちが何で盛り上がっているのかなど、そういうリサーチをするところからではないか。定点観測という言葉があったが、例えば親の話題でも、他の学校ではどのような数値なのか。どの高校と比較するかっていうところで、全然読み方が違ってくるが、その辺を留意しながらも、これまで西成高校がやってきたことのすごさ、アピールする数値というのは、比較をうまくすることでも出てくると思う。生徒の自己診断でも、過去5年なり10年なり、その節目を迎えるにあたって取り組みを総括するのにそれぞれの項目でどんな風に上がっているか、あるいは上がり止まっているかという比較を丹念にしていけることが必要。その成果を確認するという意味でも、過去5年、10年の比較は大事になる。

校長： 2015年ぐらいのエンパワメントスクールになる前ぐらいと、あるいはなってすぐぐらいと比較しても、やはり学校満足度は急激に上がっている。生徒を商品管理するみたいにして、生徒指導していた時代にはやはり低かった。それは今でも本校と同じようなセーフティーネットと言われる厳しい学力層の生徒が通う学校ではそういう生徒指導をしているが、それでは学校満足度は上がらない。よかったと絶対思わない。どれだけ力が付くと言われてもそんなことは信用できず信じられないと思っているから、なかなかそうはいかないみたいなところはあるのかなと。

本校では生徒指導の先生たちが辛抱しながら見通しを持って、生徒を育成しようという形で引っ張っていくような、今のやり方に変わったところが大きな変わり目だったのではないかと分析している。ただ、次の問題は、ちょっと緩くなったところで生徒指導事案が出てくる部分についてはまた少し揺れ戻す必要がある。常に微修正する必要があるのではないかなというふうに思う。

入学してきた生徒たちが、この子はあの悪いことする子だから、うちにはいませんという話ではないので、全ての生徒を、西成高校で卒業してもらうためにはどうしたらいいかというふうに考えている。

また、やはり先生たちが結構しつこく丁寧にずっと生徒の話を聞いているっていうのはすごいなと感心するところある。

委員： 自己診断のアルバイトの件なのですが、〈学校教育診断【生徒】(資料 3-1)の③学校の勉強とアルバイトの両立ができています。〉では 68%となっているが、〈学校教育診断【教職員】(資料 3-2)〉では、14%でかなり数字的に異なっているので、この分の評価は、先生がたの方で何があるのでしょうか？アルバイト支援を続けられているとの事で、確認したいのですが。

教員： 実感レベルで両立は難しい生徒も多くて、アルバイトの方が楽しいです。かつ、お金ももらえる。それに対して勉強はめんどくさいし、お金ももらえないので、アルバイトで遅くなった次の日の朝に学校に行くかどうかで、天秤にかけた際に“寝る”という行動をとる生徒が多い。生徒自身の実感でも、〈両立が〉できていないと思う生徒もいるし、教員もそう思って学年を見ていると思います。

校長： 〈両立〉という概念が違うのだと思う。生徒はアルバイトをやり、学校にも来ていたら、〈両立〉で、先生は両方ともきちんと出来ていたら、〈両立〉なので、概念が違うのではないかな？聞き方を変えれば、また違う答えが出るのではないかな？
このアンケートでは、アルバイトをしている生徒の割合を知りたかった。
〈アルバイトをしていますか？〉と聞くと、昔にしていた事も含めて返答してしまうので、〈両立出来ている〉ときくと、今やっている生徒のみが答えるかと思い、この聞き方になった。

委員： 2年生は、アルバイトをしていない率が3割なのですが、これは今の2年生の傾向なのでしょうか？

校長： 2年生は、(返答が)99名で少なかった。返答できていない生徒は、みんながアルバイトしている可能性が高い。2年生の在籍数は150名程なので、60名程は始業式も来ていない、あるいはアンケートの返答に間に合わなかったことになる。回答数が340名分なので、510～520名の在籍数なので、7割弱が始業式に来ていることになる。それでも実感からすると10年前よりはるかに多い。

校長： だいたい6～7割がアルバイトをしているという印象です。1年生もそれくらいですよ？

教員： はい。そうですね。アンケートをしたら、6割程度でした。(全員の回答ではないですが。)

校長： (1年生は)夏までは、あまりアルバイトも出来ていないが、夏以降から増し、冬には増えている。その事がアルバイト仲間と一緒にあって、楽しい時間になり、学校に来ない原因にもなっている。

委員： 楽しいだけじゃなくて、(アルバイトを)せざるを得ないと言う背景もあるんですよね？アルバイトも長時間になって、身体も厳しくなっているケースは、あるのでしょうか？

教員： いっぱいいます。3年生の中には、10万円を稼いで8万円を家に入れて、家事をしているという生徒もいます。学校に来れなくなっている。学校に行かないとだめな事は分かっている。アルバイトは、遅刻もせずに頑張っているが、11月には気持ちが切れて、しんどくなるので、先生方も「もう、いいやろう。」と伝えて、本人がしたい事は何かを聞いたら、「通信制(学校)に行きたい。」と、言ったので、(3年生なので)もったいないけども、その方向で進めるという事例はあった。

委員： 1時間目が1時間ずれたことは、就労学生をフォローする という、裏の狙いもあったと思うけれども、どうでしょうか？

教員： 周辺の区の生徒はよかった様です。遠方の生徒は、ラッシュアワーとずれるので、乗りやすくなったと言っています。西成区の生徒は近いから遅刻が多いし、現在も続いています。生徒達のアルバイトは22:00に終わり、その後には遊んだり、家に帰っても家事などがあったりするので、自分の時間が取れない。結局、寝る時間は3:00頃になっていて睡眠不足になっている。その分、アルバイトはしっかりと行っている。

委員： 当初の狙いの様にアルバイトが終わり、すぐに寝るではなく、アルバイト後に友達と遊んで、深夜に帰って、家事をするという事があるのですね？

校長： それは想定内です。

教員： けども1時間位は、睡眠時間が増えたのだと思います。

校長： 印象ですが、一時間目の授業に起きている率が上がったと思う。もっと伏せて寝ている生徒が多かったが、それも減った。

委員： アルバイトとの関係性はありますか？朝に強くなった事など生徒の生活全体にとって、(始業を)ずらしたことは、良かったと思うのですが、当初の狙いにあった、アルバイト学生にとって楽になる事はどうですか？

教員： (8:30登校が)9:30に間に合えば、フルで授業に参加出来るし、(10:30登校なら)遅刻の傷の浅さあるのではないのでしょうか。履修条件もあるので、メリットはあると思う。

委員： 生徒達の日常の肯定性に繋がっているのかを知りたい。

教員： 遅刻してきた生徒達は、昼から来たとしても、あと 3 時間あるので、「まだあるわぁ〜。」って言っていますね。

委員： では、そう言いつつも〈私は学校生活で押さえる所は押さえている〉という肯定性の意識はありますか？

校長： そうゆう生徒も意識的にいますね。

自分で働いて稼いで一人で生きている生徒もいる。そうゆう生徒は毎日頑張ってきています。楽しそうに高校生活をやりなしています。オープンスクールなどで、色々な話を聞いているので、「だからここを選びます。」という声は聞こえています。

委員： 一時間目がずれることがルーチンになっているので、ラディカルではあるけども、それが西成高校であり、外部で西成高校を紹介する時に「1 時間遅いのですよ」と伝えたと多くの人が「おおっ！」と言って驚かれる。その効果を〈アルバイトのこともあったりするの〉ポジティブな効果を表に出すことが西成高校の良さとして、PR 出来ると思うし、他の高校では出来ない事です。当たり前になってきたのですけども、凄い事です。

校長： ポジティブは、なかなか難しいのですけども、当初教職員が懸念していた、高校時代に遅刻せずに学校に来ることを習得しておかないと社会に出たときに困るよ！と言っていた話は、そうゆう風にして、9:30 はじまりにして、卒業していった生徒達は、(働き出して) 企業で遅刻しているわけではないし、それで困ったという事は聞かないので、そうゆう意味では、そこは杞憂に終わったかなと思っています。その代わり、“頑張らないといけない” という“自覚スイッチ”をどうやって入れてくれるかについては、丁寧に生徒達と向き合っていないとだめなのかな。と思います。一時間遅く始まるという、プラス効果はどの様に引き出して行こうかという事は、考えていかなければならないと思っています。難しいですね。

委員： 9:30 の始まりになってからの卒業生にまだあったことはないのですが、定着支援なども行っていますが、企業を回っていて、遅刻しているという話を聞いた事がないですね。そこは、社会人として頑張っていると思います。

校長： アルバイト経験でも、アルバイトでは遅刻をしない。夕方から始まるからなのではなく、アルバイトだから、仕事だから、遅刻しないのです。学校に対する甘えや勉強に対する甘く見ている部分が、小学生などからの蓄積の学校で評価されないことなどが、逆に自分達が学校を評価しないという生徒になっているので、学校は遅れても構わない、卒業できればよい位の感じでやっているのかもしれない。と思うのです。でも、アルバイトはそうは思っていないので、間違いなく始業時間の 10 分前位には、行っていると思っています。

委員： 生徒からすれば、学校もアルバイトもセカンドプレイスなのですよ。となりカフェはサードプレイスなのです。生徒からすると、セカンドプレイスの使い分けをしているのですよ。それはある程度、大人側がうまく言ってあげて、アルバイトと学校は上手に使い分けていいのだよ。社会人になるために使っていいのだよ。という事を伝えて欲しいと思う。

② 各学年の様子について

〈1年生〉

- ・50期生。218名が入学し、現在進級出来そうな生徒が180名程度である。理由の多くは、中学校から不登校で集団生活に馴染めなかった生徒やそもそも入学してから一度も登校できていない生徒もいる。他には問題行動などで生徒指導の対象となり指導を乗り越えられずそのまま転学・退学した生徒もいる。
- ・中学校入学年次にコロナ禍であり休校や分散登校を強いられた学年である。1年間を通して通学すること疲れている様子もある。2年生においても学年全体で見守っていきたい。
- ・授業について、おおむね頑張っている。集中がもたないときは教員から声をかけながらなんとか頑張らせている。
- ・進路について、明日「仕事理解説明会」が実施される。3年生時の進路選択を見据えながら1年生の時からしっかり取り組ませたい。

〈2年生〉

- ・学習面において、1年生のモジュール授業から2年生になると一気に勉強内容の難易度が上がるため、苦勞している生徒は多い。
- ・生徒指導の面において、前回の報告通り「金銭トラブル」の問題があった。コミュニケーションウィークを活用して金銭のやりとりの実情や、生徒間の悩みの把握を行った。
- ・1月に追加のインターンシップを実施した。遅刻や欠席はあったが、無事終了した。
- ・50周年式典では外国にルーツのある生徒が、日本に来て苦勞したことや今抱えている悩みなどを全校生徒の前で発表した。

《一宿泊研修についての報告》

- ・普段の学校生活では遅刻や欠席の多い学年であるが、宿泊研修中は比較的時間を守って行動できていた様子があった。
- ・集団生活の自覺を持って、お互いが起こし合うなど協力して過ごす様子もみられた。
- ・慣れない飛行機や移動などで、疲れもたまり体調を崩す生徒が数名いたが、大きな病気やケガにはならず、無事全員戻ってくることができた。
- ・考えて行動選択するべき場面でも少し常識から外れた行動をする生徒も数名いた。

〈3年生〉

1年次からチャレンジの授業を中心に、進路に向けてやってきた。自分の進路や自分自身に向き合えるかどうかで、成長が分かれてしまった。3年の懇談、コミュニケーションウィーク等を通して、進路を決めていった。向き合えた生徒は怒られることもあったが、とても成長できた。

特徴

学年の中で高校入学後に療育手帳を取得した生徒が数名いる。18歳を超えてからの取得もあった。また、障がい受容のできていない生徒もいた。実習や就活を通して自分の障がいと自分自身、適正と向き合いながら「できること」と「できないこと」や「どのように社会と貢献していけばよいか」を学んできた。

行事

カルチャーフェスタでは学年で一つの出しものをした。開会式に全員で歌った。生徒たちは楽し

んでいた。しかし文化祭をきっかけに、この3年間の人間関係の薄さや苦手さが顕著になった。コミュニケーション不足から起きる喧嘩が生じた。どちらかがにらんできた、というレベルだったが、巻き込まれる生徒が多くなったため大きくなってしまった。生徒指導と担任が介入して、一定程度大人らしく解決に向けて進んでいるところ。また高校生活も終わりに差し掛かり、我々はクロージングと思っているが、年明け以降、最後の甘えが出てきた生徒もいる。

新生活に向けて

グループホームに入る生徒や、一人暮らしをする生徒がいる。進路・コーディネーター・担任を中心に支えるということで、行政とも連携を図りながら、生活移行にむけて進んでいる。

委員： 別の高校でもペルー人の生徒をみているのですが、ペルーの文化と日本の文化の違いに悩んでいる。ペルーの文化というよりも親の文化ですよね？日本語は、スペイン語に比べて難解。その二点で悩んでいる。どのような発表になったのですか？

教員： 正直に全部を語ってくれました。今まで名前のごことでいじられたり、嫌な事を言われたりと、その気持ちを吐き出してくれたので、生徒達もよく聞いていたし、他の外国ルーツの生徒達も似た経験をしているので、入りやすかった様です。たまたま近隣小学校の先生方が来て下さっていて、そこでゲストティーチャーとして講演会をすることになりました。3/4に企画されていて、その講義に『言葉と文化』の教員が丁寧に指導し、スペイン語の表記のものは、阪大の学生さんに翻訳してもらった上で、皆様のおかげで組み立てました。一部スペイン語でも内容を披露してくれたので、皆が「かっこいい！」と言っていました。

委員： 母語が得意なので、母語であれば、自分の悩みももう少し語れただろうけども、学校では、日本語なので、その結果として、(療育手帳の判定が) B2で判定されてしまうのですよね。支援者として関わっている身分として思うのが、本人の言語的アイデンティティが日本の支援者には配慮が行き届いていなくて、代弁するのは、教員かSSWになるのですが、驚くほど、日本語が不自由なことにセンシティブではないのですよね。日本語が不自由だから自分を語れない。母語で書けば、倍ぐらいの作文は書ける。日本語も不自由なので講義も上手くいかない。代弁できる大人がなかなかいない。

校長： 確かに西成高校では、授業の時に“やさしい日本語”を使おう！というのをやっているのですが、保険だよりなどは二字の漢字の熟語が多くて、 そうじゃなくて、やさしい言葉を使う方がいい。その方がリテラシーを伸ばすことになる。先生たちも無意識のうちに授業でやさしい言葉を使っています。やたらと漢字の熟語を言う人も少ない。感想を書かす時に、「好きな言葉で書いていいよ。」と言言ってあげるだけで、きっともっと書いてくれると思う。

委員： 日本語と母国語の間の葛藤などの気持ちを、公的な場で発表することはあるのですか？

教員： 府立外教での外国人教育の研究会の中で、キャリアとしての学びもあるし、新入生のスピーチコンテストもあるし、ルーツ別の交流会もあります。ただ、実際にそこに行けるかどうかはなかなか難しいかなあと。

教員： 外国ルーツの生徒達にも声をかけたこともあるけれども、西成高校の学生達は、極度に嫌がるのです。

委員： どうしてですか？

教員： 外国の人だということを言いたくないのだと思う。恥ずかしがる生徒が多く、誰一人連れていきませんでした。見に行くことは、一度できたのですが、他校との違いがあるのだと思う。日本語指導の必要な生徒・帰国者選抜枠があるところは、積極的に行けるのですが、西成高校はなぜか行けない。アイデンティティの問題かもしれない。日本語を話さないといけないというベースが西成高校ではあるからかもしれない。

校長： 授業の感想などは、何語で書いてもいいよ。と伝えれば、中国語で書いてくれるかもしれないし、読んでもわからないけども、声掛けは出来る。訳してもらえるのであれば、確認して、本人にもフィードバックは出来るし、本人も書いたものをそうやって評価されていくことで、自尊感情も上がると思う。冒頭に言った、リテラシーをどうするのか？という部分で日本語や母国語を相互に伸ばしていくという目標を次の5年後位の計画にしたい。

委員： 一方で療育手帳を所持している生徒のリテラシーをどうやって伸ばしていくか、外国とか関係なく、何層にも分かれそうですね。

校長： おそらくそれが、多様な教育実践校に求められている力じゃないかと思う。いっぱい覚えていっぱい記憶していることを求められているとは思わないので、自分の思った事や感じたことを自分の言葉で伝えることが出来て、相手が言ったことを理解できるという、インプットもアウトプットも上手にバランスよく出来る力がある。もちろん一定の知識がないと理解出来ない事もあるのももちろんですが、必要な所から付けていけばいいと思う。

委員： もう少し言語化できたら、通信制の私学にはできないような、生徒の多様性に府立高校が対応している点を出せると思うが、後追いになっているというのはある。

校長： 全日制の高校である以上、やっぱり、対面でこだわりたいし、そこに仲間の問題や人間関係作りにこだわって学校は作っていきたい。その意味で 150 というのは、こじんまりとしていて、いいのかなあと思う。210 と 150 なら、150の方がいいのかわかりませんが、方向性としては、そうなのだと思います。

(2) 48期生 進路状況

1月24日までで138名中、就職が75名、進学が31名、その他32名。フリーターが例年よりも多いことが課題。最終、委員会にあげる資料ではフリーターは臨時労働者に入るので、「働いている」というカテゴリーに入るが、我々としては学校斡旋就職で社会とつながっていくという方向をとっていかねばならないと感じている。移行支援も賃金が発生するものに関しては就職という扱いをしている。進学は専門学校が多い。進学希望者が31名で、現在は22名が決まっている。卒業までにフリーター・その他を減らしていきたい。

質疑応答

委員：フリーターが例年より多いというのは、どのくらい多いのか、またその理由はなにか。

教員：フリーターが増えている理由としては、生活習慣が確立できていないこととアルバイトとの両立が難しいこと。また就職を必要としていない生徒、1次試験に不合格した生徒を引っ張り切れなかった。そこが進路指導の課題。例年は20～25人程度。

校長：卒業目標の生徒も複数名いる。卒業後のことよりまずは日々の学校生活に力を入れてもらいたい生徒は、フリーターの枠に入ってしまう。従来からフリーターを減らそうとしてきたが、生徒のモチベーション維持が難しい。厳しくしすぎても甘くしすぎても。

(3) その他

委員：西成区は来年100周年を迎える。テーマははっきりとしていないが、世界とつながる、世界に出ていく、おおげさかもしれないが、“世界の西成”にしていけるように、先程も出ていた20か国以上の外国の方がいて、ベトナムの人が3200人。中国の方が3000人いる。北津守地区の建売り住宅100棟のうち90棟が中国の方で、なかには私立の小学校に行かせる貿易や事業を行っている方もいる。本当に多国籍になっている。小中学校では、不登校の人も多く価値観の多様化を身近な高校生から教えてもらう、小高連携も始まっている。児童が自分達の未来を考えて、こんな風にしたいという中にも「多国籍・多文化」のものもあった。例えば、長橋小学校と今宮工科高校の連携で、小学生がゴミ箱のアイデアを出して、高校生がそれを作り、校内で使用するという展開まで来ている。万博を見据えて、『西成万博』として、梅南鋼材をはじめ西成区には歴史のあるものも多いので、区内の“ものづくり”の底力を出していきたい。役所が業者に頼んでやっても面白くないし、出来たらそれを高校生にやってもらえないだろうか？高校生が町を知ることにも繋がるし、プライドにも繋がると思う。なので、中高生が中心になって、町を引っ張って欲しい。そして、私自身が徳島出身で、徳島は藍染で有名なので、徳島の城西高校が藍の種を全国に無料配布しているので、藍染文化を広めていきたい。この活動は30年も続いており、本藍染自体は難しいが、生葉染なら、難しくないもので、そこをwebでつながって、育て方も教えてもらえるし、西成高校には畑もあるので、藍を育てられるし、夏場などは障がい者施設に水やりを頼むなど、地域ぐるみで、西成区や西成と繋がって欲しい。取り組んで頂けるのなら、100周年と西成万博の予算を引っ張って事業をやりながら、高校生や高校のモチベーションを上げて、みんなで西成ファンになって欲しいし、西成のことを好きになって、西成のことを世界にアピールしていきたい。